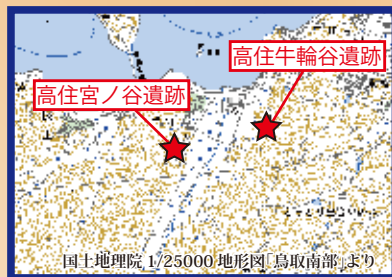


高住宮ノ谷遺跡 たかすみみやのたにいせき & 高住牛輪谷遺跡 たかすみうしわだにいせき



いよいよ調査也大詰め!!

6月から進めてきた高住牛輪谷遺跡の発掘調査も、今月下旬の調査終了に向け、いよいよ大詰めとなりました。古墳時代前期～後期（約 1,750 ～ 1,400 年前）の間に盛られたと考えられる土を取り除き、調査最終面となる、それ以前の地表面の調査を行っています。

この盛り土と考えられる土は、斜面から谷へ向かって厚くなり、最も厚みのある場所では1メートル以上ありました。しかも、比較的均質で粘性が高く、スコップやベルトコンベアにへばりつき、掘り下げに難渋しました。おそらく、谷を埋めて平らにしたと考えられるのですが、どこから持って来た土なのかはよく分かっていません。

なお、本通信 77 号でも紹介したとおり、当遺跡では、古墳時代終わり頃（約 1,400 年前）にも造成を行っているのですが、それとは土質や造成方法が異なっている点が注目されます。

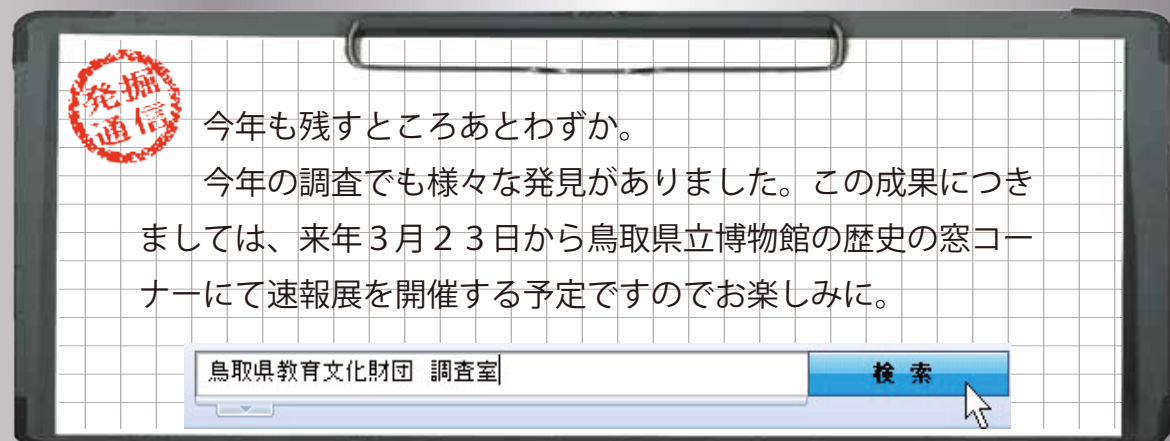


←造成土を含む谷の堆積土を土木工学的に検討するため、「剥ぎ取り」をおこないました。

土の表面に樹脂を塗り、その上に補強のため布を貼ってさらに樹脂を塗り裏打ちします。固まったら剥ぎとって、きれいにすると完成です。



薄い茶色の土が盛り土です。この上面は黒っぽくなっており、ある期間、草が生えるような地表面となっていたようです。



(公財) 鳥取県教育文化財団 調査室

〒680-1133 鳥取市源太 12 番地

TEL : 0857-51-7553 FAX : 0857-51-7550

メールアドレス : tottori-kyobun@kyobun.sakuratan.com

HP : http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasitsu_new.htm



鳥取西道路の遺跡を掘る!

第 80 号 2015 年 12 月 22 日

寒い日がつづき、鍋の恋しい季節となりました。

おでん、すき焼き、水炊き、カニすき、しゃぶしゃぶ・・・

ということで、今回は鍋に関するお話です。



お鍋のはなし。

現在、私たちが使用している鍋には、土鍋、中華鍋、おでん鍋、天ぷら鍋、タジン鍋、ジンギスカン鍋、卵焼鍋・・・、取り挙げればきりが無いほど数多くの種類があります。また、煮たり、焼いたり、揚げたり、蒸したりと用途も様々です。ですが中世までは、煮炊きに使うことが一般的でした。

煮炊きに使う道具は、鳥取西道路の発掘調査でも数多く見つかっており、古くは縄文時代からあります（高住宮ノ谷遺跡や高住井手添遺跡で出土した約 10,000 ～ 6,000 年前のものが今のところ最古です。）。縄文土器の「深鉢」と呼んでいるもので、口が広く底が尖る円錐形をしていたり、底が平らな鉢の形をしていたりします。弥生時代になると、口の部分が「く」の字状に曲がった「甕」へと変化します。この「甕」は、形を徐々に変えながら平安時代の終わり頃（約 900 年前）まで残っていきます。

平安時代の終りから鎌倉時代（約 8 ～ 900 年前）になって、ようやく「鍋」と呼ぶのにふさわしい形をしたものが現れるようになります。これは鉄製の鍋を真似た土器で、近年の調査では下

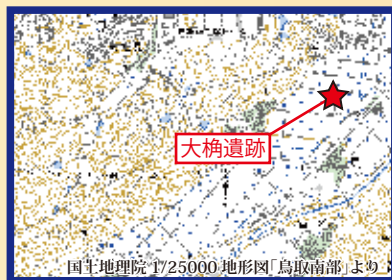
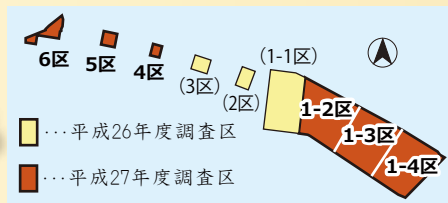


下坂本清合遺跡から出土した鍋
(向かって右は土師質土器、左は瓦質土器)

坂本清合遺跡でまとまって出土しています。当初は素焼き（土師質）でしたが、後に瓦のような質感のもの（瓦質）へと変化していきます。この瓦質の鍋は室町時代頃（約 500 年前）まで確認できるのですが、それ以降よくわからなくなります。おそらく、鉄製の鍋に切り替わっていったのでしょう。ちなみに、鉄製の鍋については、リサイクルされていたようで、遺跡からあまり出土しないためよくわかりません。

大楠遺跡

だいかくいせき



12月に入り、1-2区では弥生時代の田んぼの調査に取り掛かっています。遺跡周辺では現在も田んぼが営まれています。同じ田んぼでも、弥生時代後期（約2,000年前）には、その景色が全く違っていただがわかってきました。

現在、遺跡周辺には、長方形に区画された田んぼが、あたり一面に整然と広がっています。ところが、弥生時代には、田んぼと田んぼではないところが混在している、そんな風景だったのです。それは、あちらこちらに高いところや低いところが存在する地形であったために、水を張りやすい、低いところを選んで田んぼにしていたからです。地形を読みながら苦心して田んぼを造っていた弥生時代のひとびとが、もしも見渡す限りに田んぼが広がる今の風景を見ることがあったなら、きっとびっくりするに違いありません。

現場に寒風吹きすさぶ今日このごろ、発掘調査のベストシーズンは過ぎ去ったようです。しかし、1-2区ではまさに今、調査のクライマックスをむかえています。

熱い日々も燃え尽きて・・・

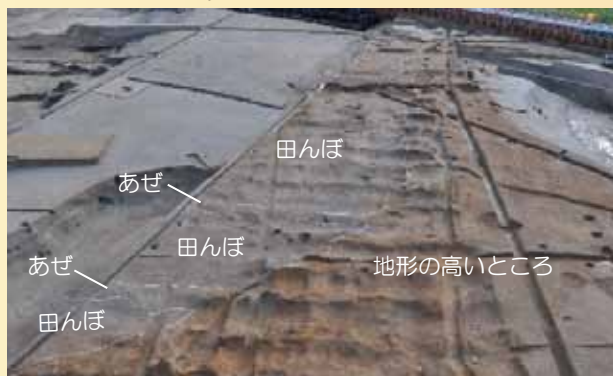
実りの秋は終わりましたが、掘り進めている弥生時代初めころ（約2,500年前）の川の跡からは、トチやクルミなどの木の実がザクザク出土しています。現在でもお菓子などに使われるトチやクルミですが、じつはとても栄養豊富な木の実で、古くから食料として利用されていました。

遺跡の周りにたくさん実る木の実を採りに来たのでしょうか？川のほとりでは火をたいた跡や土器が集中して出土する箇所がいくつかみつかり、たびたび人がおとずれていたことがうかがえます。

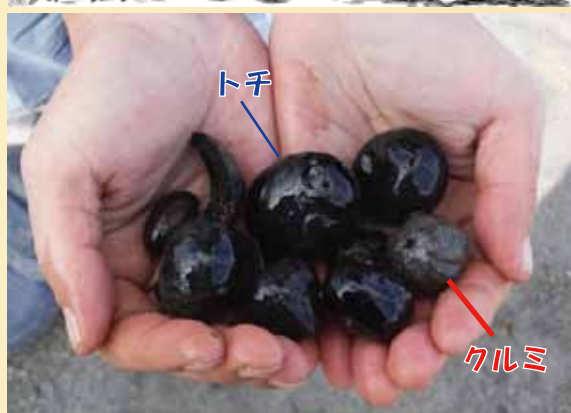
現在、調査区の周辺には水田が広がっていますが、今年度の調査で、この土地が水田となったのは弥生時代の後期ごろ（約2,000年前）からであったことがわかりました。食べ物を採りに来る場所から、食べ物を作り出す場所へ。4月から情熱を燃やし尽くした1-3区、1-4区の調査は今月で終わりますが、最後に土地利用の大きな移りかわりを明らかにすることができました。



今の田んぼ（調査区の南側）



弥生時代後期の田んぼ



川底からたくさんみつかりました。



石は木の実をたたくの用にいたのかも・・・

松原田中遺跡

まつばらたなかいせき



今年の調査もいよいよ大詰め！

12月に入って、調査もだいぶ進んでまいりました。現在は調査区北側の掘り下げを進めており、遺跡の北東部に構築された矢板列の様相が明らかになっています。調査の結果、遺跡の北側は急激に落ち込んだ低地となっており、遺跡が立地する場所は周囲より約1mほど高くなっていました。古墳時代前期（約1,750年前）の人々は、現在ではうかがい知れない複雑な地形の中から、生活適地を選んでムラを形成していたことがわかりました。また、遺跡の北東部の境界に打ち込まれた矢板列は、人工的に盛った土の土留めの役割を果たしていたことや、盛土を繰り返して居住域となる平坦部の拡張を行ったことも明らかとなりました。

まるで現代の団地造成の折の埋め立て工事のようですね！

遺跡の北東隅に打ち込まれた矢板列（矢板より右側が集落内）▶



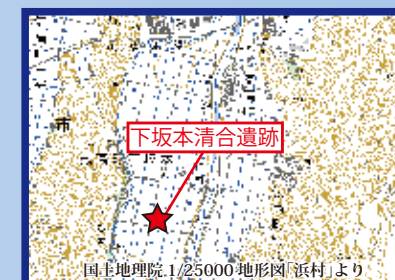
下坂本清合遺跡

しもさかもとせいごういせき

現地調査終了です。

コハクチョウの群れが遺跡の上空を舞う季節になりました。下坂本地区に冬の使者の到来です。発掘調査もいよいよ大詰めを迎え、11月26日に最後の航空写真撮影を行いました。前日の予報では降水確率70%、今年一番の寒波で大荒れのお天気になるとのことでした。当日は幸いにも晴天だったものの、突風が吹き荒れ、撮影用のラジコンヘリコプターが制御不能であわや墜落？！しかしさすがはプロの腕前です。ピンチを乗り越えて少ないシャッターチャンスをもにしました。

11月30日の調査最終日は、発掘現場の土のサンプルを採取しました。弁当箱のような四角いプラスチックの容器を地層の面に押し付けて、その部分の土を切り離して採取します。持ち帰った土のサンプルは、エックス線撮影を行って目に見えない土の中の様子を観察したり、花粉分析などを行って、当時の自然環境を復原したりするのに使います。これをもちまして、現地での調査はすべて終了です。皆さんお疲れ様でした。



北から遺跡と鷺峰山を望む



土のサンプル採取の様子